

図書館だより 第24号



(新しくなった山田図書館)



目 次

新しくなった水橋分館を紹介します.....	2
新しくなった山田図書館	3
特集 先進図書館見学記「津幡町立図書館」	4
いちおしライブラリー 第12回 「笑いが溢れるエッセイ」	6
レファレンスあれこれ	8



新しくなった水橋分館を紹介します。

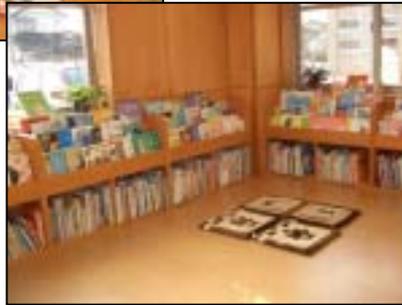
富山市の北東、満々と水をたたえた白岩川の河口近くに位置する市立図書館水橋分館は、平成 18 年 11 月 1 日、新しく生まれ変わって、図書館サービスを開始しました。

水橋分館は、昭和 47 年 7 月、旧富山市における分館第 1 号として、水橋西部公民館内に開設しました。しかし、建物の老朽化に伴い、新しい水橋西部公民館が現在地で新築されることになり、平成 17 年 11 月から昨年の 10 月まで、近くの水橋商工文化会館に移設し、継続して図書館サービスを行っていました。

暮らしに生きる図書館



木のぬくもり溢れる図書館



新しい水橋分館を訪れた人から「いいがなったね。前よりひろくなったの?」と言われますが、延床面積約 132 m²で、少しコンパクトになりました。しかし、独自の特色として、同じフロアーにある水橋郷土資料展示コーナー (83 m²) とは間仕切りがなく、木製を生かした壁面と栗の木の床は、一体感のある落ち着いた空間となっています。売薬業や北前船で文化を築いた歴史と伝統ある水橋地区を、実物や図書資料から知る事のできる図書館です。

水橋西部公民館には、地区センター、剣道や柔道の大会試合も可能な水橋練成館が併設しています。

新しい水橋分館開館に備え、利用の多い小説や料理・園芸などの新刊書、今まで所蔵していなかった大活字本は、人気の高い時代小説を中心に購入しました。また、読書の入り口に立った乳幼児が初めて出会う絵本は大幅に買い換えて気持ち良く利用してもらうことにしました。現在、約 1 万千冊を所蔵しています。水橋分館に所蔵していない本は、予約をしてもらい、他の市立図書館や、県内・外の図書館から借用して利用していただいています。また、郷土史研究が盛んな水橋地域に密着した図書館サービスを目指し、パンフレットや新聞などから、地域資料の収集に努めています。

子どもの成長に読書は欠かせないものです。子どもと本を結びつける「おはなし子ども会」を開催し、絵本の読み聞かせや、紙芝居、簡単な工作などを行って、楽しい図書館にしたいと思っています。

分館は、利用者と最も密接な立場で図書館サービスを行っていることを充分意識し、暮らしに生きる図書館として、一層業務に励んで行きます。ご利用をお待ちしています。

<水橋分館の地図>



(水橋分館 高峯)

新しくなった 山田図書館



富山市立山田図書館

- 面積：延床面積 約200㎡
住所：〒930-2106 富山市山田北山4-1
電話番号：076-457-2200
開館時間：火～土 9:30～17:30
日 9:30～12:30
蔵書冊数：約6,200冊
- 1) 約2,000冊（一般図書）
 - 2) 約4,200冊（児童図書）



<図書館の概観>

山田地域は、富山市の南端に位置し、旧富山市から自家用車で約40分の距離にあります。自然環境にたいへん恵まれた里山地域で、「スキーといで湯の里」として親しまれています。

この山田地域のほぼ中心、地方道立山・山田線沿いに、山田小・中学校校舎が改築されました。山田図書館は、学校図書館を地域に開放した形の図書館として、リニューアルオープンしました。学校図書館・公共図書館の両機能を備えることで、地域住民・学童の皆さんが利用できるようになっています。

学校の中央2階にある図書館は、道路側が全てガラス張りになっており、木目調の家具と自然の光で明るく、落ち着いた空間となっています。

<図書館の特徴>

学校図書館を地域に開放してありますので、図書館専用の玄関があります。



玄関から入って左手には、図書館専用のエレベーターがあります。

2階の図書館へ上がってくると、一般用書架と広いカウンターが見えます。館内のほぼ中央は、素足でくつろげる絵本コーナーです。



インターネット端末が1台あります。利用者の皆さんが所蔵検索をしたり、インターネット上の情報検索ができるようになっています。

図書館の奥は、学校から自由に入れる児童書架スペースになっています。背の低い書架を配置し、伸びやかな空間をつくっています。

同じ2階の図書館専用トイレには、男性用・女性用のほかに、ベビーシート付の多目的トイレもあります。赤ちゃんからお年寄りの皆さんまで、本と人との出会いや橋渡しを大切に、図書館サービスを提供してまいります。
(山田図書館 山田)

<特集>

先進図書館見学記

《津幡町立図書館》

陽光がそそぐ温かさを感じる図書館

1. 図書館の概観

津幡町は、石川県のほぼ中央に位置し、北陸の中核都市金沢市から電車で約 10 分、自家用車で約 20 分前後の至近距離にあり加賀地方、能登地方、富山県への分岐点として重要な役割を果たしています。町の面積は、110.44 平方キロメートル。人口は約 3 万 6 千人で、毎年 1~3%程度の人口増を続けています。

その町の中心市街地区に、平成 17 年 8 月、新図書館としてオープンしました。津幡町文化会館「シグナス」に併設しています。地下 1 階地上 4 階建の内、図書館は、1 階と 2 階部分を占めています。また、ホール等も完備しています。

自然の光がたっぷりとそのように設計された館内は、とても明るく、木のぬくもりにつつまれて落ち着きのある空間を演出しています。また、屋外テラスもあり、天気の良い日にはさわやかな風とともに読書を楽しむこともできます。

<図書館全景>



2. 図書館内の環境と資料

(1) インターネットサービス

(ア) 常設パソコン 3 台を設置しています。

(インターネット利用のみで、原則として 30 分間の利用が可能)

(イ) 持込み用パソコン 4 台までが利用可能です。

(最大 1 時間まで、設置済の LAN 端子を使用してインターネットの利用が可能)

(2) ゆったりしたブラウジング・スペースと豊富な雑誌群

一堂に並ぶ 100 誌に及ぶ雑誌群と新聞を、長椅子 (ソファ) に座ってゆったりと見ることができます。

(3) 低書架を全面導入した開架スペース

150cm 程度の低書架を開架スペースに取り入れて、一般図書と児童図書の両者を同一の主題単位で同じ棚として配架されています。原則として 4 段制となっています。津幡町立図書館では、これを「混配」スタイルと称しています。上段 2 段は一般図書、下段 2 段は児童図書として運用しています。大型図書は、その主題の近辺に別置き、本の表紙を見せています。

(4) 郷土レファレンスコーナー

北陸 3 県の地形図 (2 万 5 千分の 1) をそれぞれの地域ごとで完備しています。

また、岐阜県の高山方面のものもあります。

(5) 市町村パンフレットコーナー

北陸 3 県の各県を色分けし、市町村ごとにファイリングをして揃えています。内容は、観光パンフレットと文化施設案内のものが多数揃っています。

(6)交流コーナー

図書館出入口横・ブラウジングコーナーの前面には、内容は、津幡町の広報誌に限らず、近隣の河北都市のものも揃っています。西田幾太郎記念哲学館や中川一政記念美術館の企画展示の案内もありました。また、フリーマーケット、子育てサークルや育児講座、津幡町立保育園の施設解放など町民の生活に密着した情報なども掲示板で見ることができます。

<ブラウジングコーナー>



3. 図書館の特色

(1)豊富な資料を確保しながら、広い開架スペースで見せることにより、魅力ある書架づくりを構築しているという図書館の姿勢を汲み取ることができます。

(2)「みんなのへや」と呼ばれるグループ学習の場として利用できるスペースがあります。

(3)「混配」スタイルの配架法を採用することにより大人と子どもを問わず、本から情報を入手する際の選択を手助けするという役割を担っています。その例として、パソコンの活用方法での平易な本への案内が挙げられます。

しかし、利用が集中する部門で、たとえば自然科学部門や芸術部門では、本が少なくなれば、一般図書でその分を補充しているので、一定の部門を形成する書架全体のバランスや利用のしやすさなどを考慮するという課題もあると思います。

<「混配」スタイルの配架法>



4. 図書館のめざすもの

前館長の前田幸子さんの言葉によれば、「図書館とは本と出会うだけでなく、人と人が出会う場」であるとし、そのためには、図書館では、さまざまな活動ができることが求められます。たとえば、本を「手渡す」ことによって、「人のつながり」を深めていくことを意味しています。それは、単に図書館員だけでなく、利用者である町の人、そして、その人の輪をさらに広げていくことが大切であるということです。

一例を挙げれば、津幡町内在住またはゆかりのある方を招き各種行事(イベント)を実施しています。人を通して物事を学び、物事を通して人とふれあう「で・あ・い講座」を開催しています。町の文化活動の中核をなす機関として、魅力ある図書館へと取り組んでいる姿勢が伺えます。

5. 図書館の概要

平成8年7月に創立

(開架スペース約157.0㎡)

平成17年8月新図書館オープン

(開架スペース約1,160.55㎡)

延床面積 1,596㎡

蔵書冊数 約76,000冊

(収蔵可能冊数 約12,000冊)

(1)一般図書 約50,000冊

(2)児童図書 約23,000冊

(3)AV資料 約200点

(4)雑誌 109誌

(5)新聞 10紙

開館時間 平日10:00~19:00(土日は18:00まで)

休館日 月曜日、祝日、毎月末日(資料整理日)

(藤ノ木分館 坂元)

いちおしライブラリー 第12回「笑いが溢れるエッセイ」

「笑い」は気持ちをリラックスさせるだけでなく、自律神経を刺激し脳を活発にしたり、免疫力を高めたり、さらには腹筋効果があったりと、さまざまな面から健康に繋がるそうです。毎日仕事や家事に追われ、疲れている人間の心と身体を癒してくれる良薬となってくれるものなのでしょう。

ところで、昨今のお笑いブームはまだまだ続きそうですが、お笑いだけではなく、本の中にも大きな笑いの種が埋もれています。

残念なことに私の得意ジャンルの漫画からは紹介できませんが、比較的やわらかい内容のエッセイの中から、大笑いできるもの、つい吹きだしてしまうもの、不思議と口元がほころんでニヤついてしまうようなものまで、いろいろな本を紹介してみたいと思います。

みなさんの笑いのツボを刺激して、2007年の初笑いになればと思います。

まずは、とても有名な脚本家、三谷幸喜のエッセイを紹介します。



『三谷幸喜のありふれた生活』

(三谷幸喜 2002)

三谷幸喜の作品といえば独特のユーモアが光っていますが、この本の中にも同様の面白さが多数盛り込まれています。

タイトルには「ありふれた生活」と銘打たれているものの、ドラマや映画に深く関わっている人の日常は一体どのような出来事に包まれているのか、是非この本で確かめてみてください。

現在、第5巻まで刊行されていますが、どの巻から手にとっても楽しめると思います。

次は、エッセイストとしての地位を確立している原田宗典の本です。



『スバラ式世界』

(原田宗典 1992)

この本では、著者の恥ずかしい思い出を中心としたさまざまな話が、特徴的だけどなんだか憎めない文章で面白可笑しく語られています。

ちょうど今のオジサン世代の方に懐かしく感じられる話が多いのですが、誰でも気楽に楽しく読めると思います。しかし、中には医者にまつわるちょっとだけ怖いお話も…。

このタイトルは『元祖スバラ式世界』、『本家スバラ式世界』、『すんごくスバラ式世界』と続く人気シリーズとなっていて、それぞれの巻で扱っているテーマが微妙に違います。

こちらも発刊の順番を気にせずに読むことが可能です。

次は、作家・エッセイスト・「本の雑誌」編集長・写真家・映画監督等、いろいろな顔を持つ椎名誠の本です。今回は安くて美味しい肴でビールを…、という旅エッセイではなく、彼が若かりし頃を振り返って書いた本を紹介します。



『哀愁の町に霧が降るのだ』

(椎名誠 1981)

このエッセイはホテルに缶詰めにされて原稿を書いている「現在」から始まります。その後、彼がまだ貧乏青年だった頃に克美荘という古アパートで友人・仲間たちと繰り広げる青春活劇に話に移るのですが、これがなんとともいえない面白みを醸し出しています。

自身でスーパーエッセイと謳っていますが、まるで小説のような感覚にみまわってしまう本当の話です。

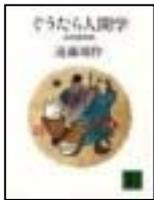


『イルカの恋、
カンガルーの友情』
(景山民夫 1987)

さすがハードボイルド系の小説を書いている人は私生活もカッコいいものです。でも、どこかとぼけていて面白い、そんな内容になっています。

いろいろな業界に精通しているようで、外国を飛び回ったり、芸能界の仕事をしたりと話の内容も多岐にわたります。中でも、時折見られる絶妙なイタズラが最高に可笑しいのです。

次は、自らを弧里庵と称し、自由気ままに生きている、遠藤周作のユーモアがいっぱいのエッセイです。



『ぐうたら人間学』
(遠藤周作 1976)

どの話からも、気の良いイタズラ心満載な著者が、ぐうたら人生を楽しんでいる様子がありありと伝わってきます。もし身近にこんなおじさんがいたら、日々の生活がすごく楽しいものになりそうです。

もう三十年前に出版された本で、私が生まれる前に書かれたものでありながら、今でもその面白さは現役ですので、是非若い方に読んでもらいたい一冊です。



近年 web 上でブログタイプの日記がはやっています。次の本はとある教員の人気ブログを本にまとめたものです。



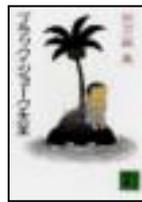
『ダメよダメダメ ダメ教員』
(井山幸大 2005)

オタクでモテない高校教師、自称 "ダメ教員" が、自身の私生活から面白エピソードを赤裸々に告白

しています。

教師としての生活、お見合いに連続して失敗している話、さらには下ネタまで、いろいろと面白おかしくつづっており、爆笑度 No.1 のオススメ本です。

最後に番外編を一つ。



『阿刀田高の
ブラック・ジョーク大全』
(阿刀田高 1980)

これはエッセイではないのですが、日常の一幕をブラックジョークで皮肉った、一言二言の会話で完結するショートショートストーリーが満載されていて、読み進めていくうちにジワジワと可笑しさが込み上げてきます。

これも私のお気に入りの一冊で、ついふざけてマネしてみたくになってしまうようなシチュエーションが多数あります。

思いどおりに他人を笑わせるということは非常に難しいことだと思います。

特に、音や映像なしに、文章だけでその場の雰囲気と面白さを伝えられるような、表現力のある人が羨ましくも思えます。

いつか自分もこれらの本に負けないくらいの自伝的面白エッセイを…

(本館一般図書室 新保)

レファレンスあれこれ

図書館の使命のひとつに、郷土資料の収集・保存があります。富山市立図書館では、行政資料や統計類、郷土史を中心に約3万冊をとりそろえ、市民に提供しています。

今回は、その中から明治時代の富山についての質問を2つ紹介します。

Q. 富山市岩瀬地区にある「森家」(国指定重要文化財)は、北前船回船問屋の森家が、各地の富を集め3年の歳月をかけて明治11年(1878年)に建築した建物で、当時のたたずまいを残す東岩瀬回船問屋型町屋の一つである。その「森家」を造った森家(一族)の歴史について、由緒や人物等詳しく知りたい。



A. ポートラムの開業により、岩瀬地区では観光客が増え、重要文化財「森家」は観光スポットとなっている。この「森家」が建てられた背景を知りたいとのこと。

『越中百家』上下巻や『東岩瀬郷土史』、『東岩瀬史料』等、基本史料をあたってみるがなかなか森家に関する詳細な記録がみつからない。

『富山大百科事典』や『富山市の「文化財・史跡案内」』には、重要文化財となった森家の建物についての記述はあるが、その主^{あるし}であった森家については何も書かれていない。

そこで、森家が北前船の回船問屋であったことから、北前船関係の文献を調べてみると、『バイ船研究』などの資料の中にいくばくかの記述が散見された。

なかでも『加賀藩の海運史』(高瀬保、成山堂書店、1997)には、第8章・北前船の経営の項で「森林太郎家」として簡単な系図とともに紹介されており、一番よくまとまっていた。

Q. 明治のはじめ、立山を通して長野に抜ける立山新道は、その険しい道程ゆえに維持管理が難しく、わずか数年で廃業し今は残っていないが、その当時の道筋が知りたいので、地図や図面などの資料をみたい。



A. 「立山新道」に関する本は見つからなかったので、類似の「立山道」の本をあたってみる。『富山県歴史の道調査報告書 立山道』や『富山県歴史の五街道』(塩照夫、1992)を探すが、「立山新道」に関する記述は見つからない。

『富山県史 通史編V 近代上』には、立山新道の経路の簡単な説明が掲載されていたが、図はなかった。

質問者から、富山側は日大山町を通っていたとの手がかりを得て、『大山町史』(大山町1964)、『大山の歴史』(大山の歴史編集委員会 1990)を調べてみると、後者に「日本アルプスを越す立山新道」という章があり、有料道路の開通から失敗までの流れが詳しく書かれていた。その中の545ページには、立山新道見取図があり、ザラ峠～平ノ小屋～針ノ木峠を經由して大町に至る経路図がわかりやすく紹介されていた。

また後日、『異人たちが訪れた立山カルデラ - 立山新道と外国人登山 -』(立山カルデラ砂防博物館・企画展)の中にも、立山新道に関連する絵図の写真が掲載されていることがわかり、合わせて提供した。

(本館参考図書室 濱口)



平成19年1月20日富山市立図書館 編集・発行
HPアドレス <http://www.library.toyama.toyama.jp>

富山市丸の内1丁目4-50 TEL 076-432-7272
E-mail lib-02@library.toyama.toyama.jp